イースター　喜びの発見

中　道　基　夫

イースターの物語は空っぽの墓の発見から始まります。

日曜日の朝早くのことでした。女性の弟子たちが、葬りの習わしとしてイエスの亡骸に油を塗りに墓に行ったところ、墓は空っぽで、そこにはイエスの亡骸がないということを発見しました。空っぽの前で立ちつくす彼女たちは天使から「イエスはここ（墓）にはおられない」という言葉を聞きます。それは、先日まで生きていたイエスを失った上に、死体までなくなってしまったという二重の喪失ではなく、全く期待していなかったイエスの復活を発見するという出来事でありました。

この物語は、わたしたちを新しい発見へと導いてくれます。イースターというのは、死の中にいのち、絶望の中に希望、悲しみの中に喜び、敗北の中に勝利を見いだすことです。期待もしていないところに、むしろ何の可能性も見いだせないところにもっとも大切なものを発見するということです。

「千の風になって」という歌が、話題になっています。日本語の歌詞（「私のお墓の前で、泣かないでください。そこに私はいません。眠ってなんかいません。千の風に、千の風になって、あの大きな空を吹きわたっています。・・・・・」）は新井満氏がオリジナルの英語の詩を彼なりにアレンジして日本語に訳したものです。これはメアリー・フライが書いた詩で、いくつかのアレンジされた詩が広まっています。彼女には、ナチ政権下からアメリカに亡命してきたユダヤ系ドイツ人の友人がいました。その友人はドイツに残した母親の死を知るのですが、何もできず悲しみに暮れていました。その友人を慰めるために彼女がこの詩を書いたといわれています。まさにこの詩にうたわれている「墓の中に私（イエス）はいません」が、弟子たちが聞いた最初のイースターのメッセージでした。

わたしたちの周りにはいくつもの暗闇があります。日常生活ではいくつも小さな死に出会います。それはわたしたちの目を引きつけ、わたしたちを閉じこめてしまいます。しかし、そこには本当にわたしたちが見るべきものはないのではないでしょうか。イースターはわたしたちにそんな喜びの発見を教えてくれます。

Do not stand at my grave and weep　（by Mary Frye）

Do not stand at my grave and weep,
I am not there, I do not sleep.
I am in a thousand winds that blow,
I am the softly falling snow.
I am the gentle showers of rain,
I am the fields of ripening grain.
I am in the morning hush,
I am in the graceful rush
Of beautiful birds in circling flight,
I am the starshine of the night.
I am in the flowers that bloom,
I am in a quiet room.
I am in the birds that sing,
I am in each lovely thing.
Do not stand at my grave and cry,
I am not there. I do not die.

（神学部准教授）